

## 拒否した力の支配

### 民主化を求めた光州事件の教訓—その取材記から

▽2008・07・15

非核の政府を求める京都の会

齊藤 忠臣

みなさん、こんにちは。齊藤忠臣でございます。改めましてよろしくお願いをいたします。本日は28年前の5月に、韓国は光州市における光州民主化運動、いわゆる「光州事件」について、その取材からの報告をさせていただきます。

「光州事件」の概要につきましては、お手元のコピーを眺めていただければと思います。

で、いままぜ「光州」なのかということですが、実は昨年秋10月、光州市にあります湖南大学で「平和」をキーワードにしたシンポジウムがあり、そこで光州事件について基調講演という形で話してまいりました。

1980年5月に光州であった出来事—つまり軍隊が国民に銃剣を向け殺すという、あの「光州事件」は、当時朝日新聞の記者だった私が、韓国を取材旅行中に遭遇した出来事でありました。恐らく、カメラマンを含めた私たち二人が、あの事件を取材した数少ない日本人ジャーナリストではなかったかと思えます。

そういうことで講演の依頼があったわけですが、でも、なぜ、いま光州なのかということについて私なりに考えたことは、およそ次のようなものでした。

- ① 金大中政権以降、さらに革新系の前ノムヒョン政権下で、政府による情報公開が進み、真相がさらに分かったこと。
- ② 韓国内で、左右の政治勢力の再編成が繰り返され、かつての保守与党対革新野党的な構造（冷戦構造）がほぼ完全にくずれたこと。そのため、朴、全政権時代の様々な弾圧事件について、被害者側の視点だけでなく、国民的な視点で見ることが可能になったこと。

以上のような文脈で、現代史の中に埋もれていた様々な出来事を、メディアなどで自由に表現する気運が高まったのではないかと、これは私なりの分析です。ちょうど2カ月ほど前の5月10日に映画『光州5・18』の全国ロードショーが始まりました。ご覧になられた方もいらっしゃるかと思います。この映画は韓国で去年7月に公開され740万人の大ヒットとなりました。映画を作ったキム・ジフン監督は「埋もれていた事件の真相を国民に知らせ、自分の無知を犠牲者の方々に懺悔（ざんげ）する映画を作りたかった」とインタビューに答えています。

韓国では、一定の経済成長を遂げたことで、狭いナショナリズムによらない国民的な一体感が形成され、光州や済州など、マイノリティーとされていた地域の出来事についても、フェアで中立的な立場で関心が集まり始めています。かつて慶尚道エリートが政・官・経済・文化まで支配し、全羅道や済州島などへの差別構造がハード・ソフト両面で存在していましたが、経済発展や交通網の整備などで、少なくともハード面での差別構造はかなり解消されました。ソフト面でいえば、百済（くだら）など、古代の非・慶州（新羅）を舞台とする歴史物のドラマが流行り、文化的にも各地域のアイデンティティーの一つとして、見直されるようになってきています。耳にされたことがあるかも知れませんが、例えば「平和の島・済州」「平和の街・光州」といったアピールなどがあげられます。

私は去年の5月まで、広島平和文化センターという広島市の外郭団体の理事長をしておりました。63年前に広島に投下された原子爆弾による被爆体験を原点にして、核兵器の廃絶と世界の恒久平和の実現に向けて取り組んでいる公益法人であります。その広島と光州、この二つの都市が、実はまだ大学・研究者の段階ではありますが、数年前から「平和」をキーワードにした交流を始めています。シンポジウムの開催はその一環でもありました。

それでは私が経験した光州事件を、当時の取材メモや掲載した記事などをもとにお話させていただきます。まず、私たちが1980年5月にどうして韓国・光州市内にいたかということであり  
ます。

朝日新聞はその前年の1979年に創刊100周年を迎えておりました。そしてそれを記念して日曜版に「世界史の舞台」を、また夕刊に「世界30万<sup>キ</sup>ドライブ」の連載をはじめました。「世界史の舞台」は歴史の転換点に重要な出来事が起こった現場を訪ねて「現代」を考えるとという趣向です。合わせて「世界30万<sup>キ</sup>ドライブ」では、取材チームが訪れた国を車で走り、人々の生活などを紹介するというものでした。私とカメラマンがアメリカ・ハワイとインドネシアの取材を終えて韓国に入ったのは1980年の4月16日です。

実はこの一連の大河連載の締めくくりが韓国だったのです。

韓国での取材は「世界史の舞台」からはじめました。

豊臣秀吉の軍勢を迎え撃った救国の英雄の李瞬臣（イスンシン）将軍の活躍とその生涯や、1919年3月の「独立運動」の際、日本の官憲が村人の多くを教会に閉じこめ焼き殺した堤岩教会の事件などを取り上げました。その紙面を持参してきましたので、よろしければ後ほどご覧ください。

そして5月16日に「世界30万<sup>キ</sup>ドライブ」の取材を開始し、ソウルから江原道・春川を経て高速道路を東海岸に向け出発しました。その2日目です、朝鮮人参などの取材し、雪岳山に登って東草の宿に帰り着いた時、朝日新聞ソウル支局から「すぐに戻ってこい」との電話があったのです。5月18日夕方のことでした。

光州市で学生のデモがあり、その規模は大きくなりそうだ——というものでした。

私たちがまだソウルにいたころ、そう、14日と15日にも全国の大学で朴大統領殺害事件のあと敷かれている「非常戒厳の解除」と「全斗煥（チョンドファン）の退陣」そして「民主化」を求めるデモがあり、ソウルでは10万人にも迫る規模になっていました。

（写真）

そして学生たちは5月17日、梨花女子大で全国56大学約100人の代表者会議を開き、政府・軍当局は少しも「民主化」のことを考えていないと結論づけ、戒厳令の即時解除と全斗煥司令官の退陣を要求し、これが入れられなかったら再び街頭デモを始めると決議しました。政府・軍当局は、これまでの学生たちの整然とした動きを見て、先手必勝しかないと判断し、梨花女子大に機動隊を送って学生リーダーを連行する一方、金大中氏らも逮捕。18日午前零時を期して、これまで済州島を除いて実施していた非常戒厳令を全土に拡大しました。これは実質的なクーデターでもありました。

韓国の戒厳法によりますと、地域戒厳の場合は国防相が戒厳司令官の指揮監督をしますが、全国戒厳になれば大統領がとります。このため戒厳司令官は全国戒厳になると国防相に邪魔されずに大統領と直結できるわけで、その分だけ「軍服」と大統領の距離が狭まることになります。

とくに朴大統領の死去後、たまたま大統領に就任した崔圭夏氏のように、軍への影響力がない場合は、「軍服」の意向がほとんど完全なたちで伝わる結果となります。だから非常威厳が全土に拡大されたのは、実質的軍政に入ったことを意味しました。

当時の日本の新聞を繰ってみます、各紙とも一面にそのような見出しが躍っています。

朝日は「事実上の軍政移行」

毎日「韓国、実質的軍政下に」

読売は「事実上の軍政に」

日経は「全面軍政へ」

産経は「軍部が実権握る」

東京は「事実上の軍政しく」

——というものでした。

過去、朴政権の強圧ぶりを見せつけられてきたことを考えると、ですから反政府デモもこれであったん収束すると思うのが普通でした。しかし、その後で「光州の爆発」があったのです。あとから考えると、確かに気になることはありました。

「光州では夜間通行禁止時間が3時間繰り上がって午後9時からになった」

「学生のデモに市民が関わっている」

「空挺部隊（特戦団）が制圧に出ている」といった断片的な情報が流れていたからです。現地光州からソウルにやって来た人の話などでは、光州市の反政府行動は、戒厳令の全土拡大後に始まったのではなくて、それ以前からずっと続いていたことも明らかになり、戒厳当局の過剰ともいえる制圧ぶりが事態を一挙に悪化させていきます。

このため私たちはすぐソウルに引き返し、翌19日朝、ソウルから出る定期の高速バスに飛び乗り光州に向かいました。しかし、光州郊外のインターチェンジで降ろされ、あとはタクシーか歩いていけと言われました。

そうです、もうすでに騒乱が始まっていたのです。

ここからは、当時の取材メモ、記憶を時系列で辿りながら話を進めてまいります。

### ▽5月16日・民主化へ点火

私たちがソウルから東海岸に向けて出発した16日の夜、光州市にある国立の全南大学の学生たちが「たいまつデモ」を行ったのが最初でした。学生たちはこの夜から学内で籠城闘争に入り、非常戒厳令が全国に拡大された18日朝、機動隊の排除にあいました。このとき教授の一人が立ち上がり、重傷を負ったのです。一説には亡くなったと言う情報もありましたが、ともかくこれが発火点になりました。

学生たちは口々に「全斗煥（チョンドファン）退陣、非常戒厳令撤廃、言論・学園の自由を保障せよ」と叫びましたが、ただ口で叫ぶだけのデモで、みんなまったくの素手でした。これに軍隊が弾圧的な規制を加え、この日だけで相当な数の人間が死んだと聞きました。銃こそ発砲しなかったが銃剣で何人も突き刺したということでした。

そして私の取材メモ帳にはタクシーの運転手さんの話として「東芝橋のたもとで女子大生を裸にして殴った」という記述があり、最後に流言飛語か？とも書き加えてあります。

ともかくこうした状況に光州市民らが「あまりにひどい、イヌ、ブタなみの扱いだ」と怒り、翌19日から学生を支援するようになったのです。

（こうした光州につながる一連の動きを遡ってみますと、実は4月の21日にたどり着きます。年表の4月21日、江原道の東原炭坑で労働者決起と書いていますが、そこに至る年表の流れを見ても分かりますように、統制の厳しいマスコミの内部にも言論の自由を求める動きがあらわれてきます。有力タ刊紙『中央日報』の記者たちは、この東原炭坑で起こった労働紛争を取材中の同僚が捜査員に乱暴され重傷を負ったという記事が戒厳司令部の検閲で掲載禁止になると、その部分を白紙で出すことにし、事実、早版でそれを実行しました。朴政権下でも各紙の記事はしばしばボツにさせられていました。しかし、当局は必ずその穴埋めをさせ、紙面の一部が白紙化することを禁じてきました。それが、たとえ1紙の早版だけとはいえ防げなかったわけです。

さて、では戒厳当局はなぜ、早々と空挺部隊を光州に投入し、大々的な作戦をとったのでしょうか。空挺部隊というのは、当時、アジア最強と謳われた集団でした。それは、現地全羅道の反慶尚道感情を見なければなりません。

先ほど少し触れましたが、全羅道と慶尚道は、昔の百済と新羅の時代から仲が悪かった。これが朴正熙政権18年の間に、憎しみに近いところまで行ってしまいました。慶尚道出身の朴大統領は、自分の周りを慶尚道の出身者で固めます。慶尚道偏重は軍、政財界はもちろん、言論、文化、スポーツなどの分野にまで及びました。

経済開発も慶尚道により多く振り向けられました。工業立国のかげ声にそって慶尚道の都市に自

動車と造船、製鉄、機械、電子工業の大工場がつくられ、自由貿易地域も設置されました。ソウルから出る高速道路も慶尚道方面へは4車線、全羅道方面へは遅くできたうえ2車線という格差がつけられました。ソウルとそれぞれの地方を結ぶ列車ダイヤも密度に違いがあり、特急列車の車両のよしあし、サービスにも差がありました。

それが独裁的権力の下で反対の声もあげられぬまま遂行されてきたのです。

その日の当たらぬ全羅道から一人の有望な政治家が生まれます。それが金大中氏でした。彼は野党の中で着々と実力をつけ、1971年4月の大統領選挙で朴正熙氏と一騎打ちするまでになりました。朴陣営は大統領と同じ慶尚道出身の李厚洛KCIA部長を中心に、慶尚道の票固めと全羅道の切り崩しに精力を注ぎます。

こうしたシコリは心の奥深いところに沈潜します。しかも慶尚道出身の全斗煥司令官らは戒厳令の全土拡大決定と同時に、「学生らの背後操縦」の疑いで金大中氏を逮捕するのです。このため金大中氏釈放要求などが大きくならぬうちに徹底的に抑えてしまおう、と思ったのでしょうか。その結果の空挺部隊の派遣でした。部隊の精鋭もまた慶尚道出身者が多くを占めていたことは、いうまでもないことでした。

### ▽5月20日・軍と対峙

アジア最強と言われる黒ベレー（空挺部隊）が、光州市内のメイン道路はおろか路地裏まですべての要所を戦車と装甲車ジープで固めました。

そして夕方から深夜にかけて全羅南道庁の前のメイン通り、錦南路で学生・市民側と軍隊が対峙するのです。

午後6時ごろでした。錦南路二丁目の50m四方の交差点に学生・市民がびっしり集まり、集会を開きます。次々と学生が立ち上がってスローガンを叫ぶ。そのつど商店のおじさんたちがコブシを振り上げ拍手をする。やがて学生らが運転するバス、タクシーがやって来て、バスが縦一列、その後ろに緑色のタクシーが約50台並びました。

そのバスとタクシーがいっせいに前照灯を点け、バスが軍隊に向かって前進をはじめたのが午後7時25分ごろでした。

双方の距離は約700m。バスは最初ゆっくり前進しました。そのうち一台のバスがすっと前に出ます。兵隊がさつと左右に分かれ、両側から催涙弾をぶち込みました。窓ガラスがみんな割れ、しばらくは煙で何も見えなくなりました。やがて中から学生がむせびながら出てきます。約10人でした。それを兵隊が一人に三人、四人で飛びかかり、こん棒でめった打ちにしました。

9時半すぎ、MBC放送局に火の手があがり、あっという間に燃え上がりました。この間も錦南路の光州観光ホテルの中心付近では、催涙弾を撃ったあとの弾の赤い火が、あちこちで飛んでいるのが見えました。

そして翌21日に本格的な銃撃戦が始まるのです。

### ▽5月21日・市民の眼前 銃撃戦

学生側が「午後3時までに道庁前に集まれ」と呼びかけ、前日まで市内のあちこちにいた戒厳軍もすべて道庁前に集結しました。再び錦南路で対峙したのですが、ただ前日と違うのは前面に立った学生たちが手に手に銃を持っていたことでした。朝には1丁しか見かけなかったのに午後になるとみんなが持っていました。それをトラックの上から構えたり、全南大の屋上には機関銃が2丁すえつけられたという話も聞きました。

光州から少し離れた和順の警察署と光州近郊の軍の分駐所、軍需工場などから手に入れてきたということでした。軍用トラックやジープ、装甲車まで用意していましたし、和順の炭坑からはダイナマイトを持ってきたという話もありました。

光州の学生たちは「正当防衛」のために自らも武装したのです。私にはそう映りました。そして分乗した学生らは口々に「市民は立ち上がれ」「俺たちに続け」と叫び、主婦たちが炊き出しを始め、あちこちの町内ではカンパ金を入れる白線の入った学生帽が回されましたし、米や清涼飲料水、即席ラーメンが市民から学生側に次つぎと届けられました。

銃撃戦のきっかけは午後3時すぎのことでした。  
道庁前を固める戒厳軍と、学生・市民約1万人がにらみ合いを続ける中、突然バーンと一発の銃声が響きました。どちらが先に撃ったのかはわかりません。  
一带をともかく狂気が支配しました。  
逃げまどう市民。銃を水平に構える戒厳軍兵士、学生。あとはもう騒乱状態です。私たちの近くで若い男が胸を押さえて倒れました。  
銃声は戒厳軍が朝鮮大学に引き揚げる午後6時か7時ごろまで続きました。

私たちは全南大学付属病院へ行きましたが、ここもまるで戦場でした。治療室だけでは足りずロビーにもマットが敷かれていました。三日前からの市街戦で病室はどこも満員でした。この間にも血に染まった人が次々に運び込まれ、遺体安置所には死体が累々と横たわっています。市民、大学生、高校生、それに機動隊員の遺体もありました。棺に納められた人も少なくありませんでした。

懸命に治療にあたる若い医師が「学生も兵士も、ともに国を愛する気持ちに変わりはないのに…」とうめくように言った言葉がいまも強く印象に残っていますし、「ともかくこの惨状をこの出来事を、日本に、世界に伝えてくれ。光州でこんな事件が起こっていると」「そのために我われは取材に必要なあらゆることに協力する」。

そう言った若い医師の真剣な眼差しもまた鮮明に覚えています。

新聞社や放送局にも投石があり、火が放たれました。「いつも正確な報道をしない」という理由からでした。

犠牲者の遺族を訪ねました。妻と子ども、それに母親を養う腕の良い大工さん。その母親がいきました。「一緒に出かけた仲間の話では、あの子は銃を持たなかったし投石もしなかった。ひと言だけ『非常戒厳解除』と叫んだだけだったのに…」

その母親の話を聞いている時、突然若い男三人が飛び込んできて私たちに「お前たちは何者だ！」と叫んで胸元に銃を突きつけました。一人は「殺してしまえ」とも言いました。身分証明書を出し、取材の意図を説明すると落ち着いてきたのでしょうか、「この事態を正確に世界に知らせてほしい」と言って走り去りました。最後にタオルの覆面を取った三人の顔はとても幼いものでした。

## ▽5月23日・光州脱出

光州は23日も出入り禁止になっていました。市内に入る道はすべて戒厳軍が遮断していました。けれども全南大学の医師や学生らが「この事態を早く世界に伝えて」という思いが私たちを突き動かしました。

泊まっていた旅館の食料は底をつき、宿の主人が「命の保障はできませんよ」といってローソクを持ってきました。宿の壁に銃弾が打ち込まれたため「灯火管制」を敷くのだという説明でした。私たちはそのローソクの下で地図を広げ「光州脱出策」を練りました。そ

して23日朝、宿の制止を振り切ってあぜ道から線路沿いに、さらにけわしい山道へと分け入り、戒厳軍の目を避けながら黙々と歩きました。

時間にして約3時間ぐらいたったのでしょうか、とある農家が見えてきました。庭に小型のトラックが止めてあるのが見えました。その農家に飛び込んで「ソウルまで走ってください。ともかく大事な仕事で急いでいます、お願いします」頼み続けました。その三拝九拝が功を奏して朝日新聞のソウル支局までたどり着いた時のうれしかったこと。アクセルを踏み込み続けフルスピードで駆けてくれたこの農家のおじさんの心意気にも感激しました。そしてすぐ東京へ送稿した原稿が、5月24日付の一面トップに掲載されたこの記事です。

見出しは「怒りの光州 血と破壊と 現地に見る」「市民目の前で銃撃戦」「炊き出し、学帽カンパ」というものです。

これが朝日新聞に伝えられた最初の現地レポートでした。

## ▽5月27日・再びの光州

ソウル支局長から「死ぬかもしれないが、もう一度光州に入ってくれ。家族に手紙だけは書いて行くように」という指示を背に、私たちがソウルから再び光州に向かったのは27日でした。20数回に及ぶ戒厳軍の検問を受け、山沿いにチャーターしたタクシーで入った再びの光州はとつぷりと暮れた夜。灯火管制で街は真っ暗でした。

光州では23日に学生らが銃を道庁に返し始め、市民も事態の収拾に動こうと弁護士や大学教授らが「事態収拾対策委員会」をつくり戒厳軍と交渉を始めました。しかし一部が武装解除を拒否。交通も通信も遮断され「陸の孤島」と化していたそんな光州で、軍は27日未明、道庁に立てこもっていた学生を急襲し多数が死亡しました。そのことを知った私たちは、とにかく光州の様子をもう一度確認しなければと、その夜に入ったのです。

「軍は初め、薬品入りの弾を撃ち込み、昏睡状態にして200人近くを捕まえた」と聞きましたし、立てこもっていた学生の一部は銃を持って山中に逃げ込んだといううわさでした。一週間前「我われが立たねばだれが立つのか」と語り、カービン銃を片手にバリケードの中に消えていった長髪の学生はどうしたのだろう。そして泣きながら投石をしていた女子大生。「金大中釈放」を叫んでいた高校生たちは無事だろうか。そしてカンパ金集めの先頭に立っていた商店主や主婦らは…。光州に向かう道中、そんなことがずっと頭の中を占めておりました。

午後9時以降は外出禁止でした。残り時間は30分。灯火管制の街を走っているのは私たちだけでした。突然、十字路でバラバラと5、6人の兵士が飛び出し、ライフルを構えて「ホールド・アップ」と命令されました。彼らは引き金に手を掛けながら、記者証、身分証明書、パスポートを入念に調べながら「不用意な態度には発砲も辞さない」と念を押ししました。目をこらすと、ポプラ並木の根っこに、橋のたもとに、ゴミ箱の陰に、そしてビルの屋上にと周りは兵士だらけで、みな小銃をこちらに向けていました。光州は暴力的に制圧されていました。

翌28日朝、まともな窓ガラスが一枚もない道庁に職員が出勤してきて、「久しぶりね」と抱き合っていましたし、戦車と兵士だらけの街には「朝売り」のおばさんの姿が久しぶりに見られ、光州は以前の生活に戻りつつありました。けれど、砲口を市民に向けた多くの戦車がまだ随所ですらみをかきせる中、光州のある知識人は27日未明の戒厳軍の攻撃を「まるで敵国の都市に対する攻撃のようでした」と表現し、さらにこう言いました。

「学生や市民の叫びを力で押さえつける。なるほど政局は一時的に小康状態を保つでしょうが、でもその分、学生たちの力は沈潜し、内向し、またいつか爆発するのです。今度の事件だって、戒厳解除、全斗煥退陣、言論と学園の自由保障という要求はなに一つ解決していなじゃありませんか。貴い血だけが流れたのです」

あの言葉がいまも耳元に鮮明に残っています。



こうして全斗煥は80年の9月に大統領に就任し87年まで軍事独裁を続けましたが、その後、盧泰愚（ノ・テウ）大統領は「光州事件の性格」を「学生と市民の民主化のための努力」と規定し、「光州事件の解決なくして国民の和解は達成できない」とも語りました。

つまり、光州事件は「暴徒による暴動」ではなく、全国的な民主化運動の流れの一環とされたのです。当然の帰結だったと思います。



以上は28年前の取材報告であります。その取材の中でいくつか印象に残ったこと、その後に感じたこととお話します。

① 全羅南道の人たちにとって一番刺激的だったのは、彼らと日頃仲の悪い慶尚道の兵士を送り

込んで無差別にやっつけたという話をよく聞いたことでした。黒ベレーは慶尚道出身者をたくさん集めてメシを与えず、酒ばかり飲ませて殺気立たせたという話もよく聞きました。真偽のほどは私には分かりませんが、とにかくよく聞きました。そして光州であった慶尚道出身者の一人は、高校生のスローガンに「金大中釈放」とあったのをとらえて、この騒乱は地域感情の爆発なのだと冷笑していました。けれども、そのことにこだわり、それをより強調し拡大して見ることは、民主化という大義のビューポイントを歪め全体を見失うことに繋がるのではないかという疑問が、最後まで私から消え去りませんでした。

- ② そしてこれも事実ですから報告しておかねばなりません。昨秋、湖南大学で初めて話したことです。私たちは戒厳軍の検問を何カ所も突破して光州に入りました。いや、入ることが出来ました。外国のメディアといえども出入り禁止の光州にどうして入ることが出来たのか。当然のことながら、そういう疑問はあると思います。

私たちはソウルから「OKタクシー」をチャーターして向かったのですが、その運転手が軍隊を退役したばかりだったこと、そして最初の検問所で通訳のキムさんが兵隊さんと折衝したのですが、キムさんは慶尚南道・釜山の出身で、相手の兵隊も釜山の出身者でした。お互い言葉の訛りで分かったのです。それで厳しく検問するどころか、とても友好的な状況が生まれ、「いいか、暗号を教えるから次からはこの暗号を言えばフリーパスさ」といって「兵隊さんが一人、二人」という暗号を教えてくださいました。青井さんは「小鳥が一匹、二匹」ではなかったかなと、二人の間で若干の記憶違いがあるのですが、とにかく以後、20数カ所の検問は敬礼付きでまこと見事に通過できたことはいまでもありません。この予期せぬ出来事は、私の取材における光州事件の一つの断面であったことは間違いのない事実であります。あのやり取りがなければ二度目の光州取材は出来なかったと思います。

- ③ いまひとつ感動的に記憶していることは、20日の夜、学生たちがバスで軍隊に突っ込む時、捕まる覚悟だったことです。突っ込んだ学生たちは絶対逃げられなかった。しかも兵隊をひき殺そうと思えばできたのに、それもしませんでした。何台もが並んでフルスピードで突っ込めば一挙に何人も殺せたのに、です。そこでは学生に殺意はありませんでした。それはある意味で殉教でした。自分たちの要求はこれほど切実なのだという示威行為、そのための殉教だったのです。27年前、そうして流された貴い血の犠牲の上に「いま」があることを、あらためて思います。

- ④ 私たちは、この光州報道を「約束違反」として外交部から呼び出しを受け、強制帰国となりました。「世界史の舞台」と「世界30万\*。ドライブ」の取材で、事前に詳細な計画表を提出させられていて、それに沿った形で行く先々の市町村にお役人らが待っているという段取りが出来上がっていました。勝手な行動はダメだぞというわけです。私たちはそれを無視して光州の取材を優先させました。待ちぼうけをくらった市町村からの連絡と、朝日新聞に掲載された記事などからそれが分かり、厳しい尋問を受けました。私たちは目の前にとんでもない出来事が発生していたら、何よりもその取材を優先させるというのがジャーナリズムの当たり前前の風景だという主張を最後まで通しましたが、理解は得られず、「あなた方はリストに掲載した。もうわが国を訪問することは出来ない」ということでした。そしてリストから名前が消えましたという丁寧な連絡が韓国側からあったのは帰国後10年ほどたってからでした。

- ⑤ 戒厳軍が固める光州へ再び行くことになった際、支局長から「死ぬかもしれないが、行ってくれ」という命令があったと申しました。私たち聞く方も、あの時、さしたる抵抗もなく「分かりました」と返事をしています。むしろ。それは当然だろうなという気分でした。ジャーナリズムの最前線では当たり前という受け止め方が、あの当時はありました。いまはどうでしょうか。

湾岸戦争以後の戦争報道は、ハイテクを駆使するなど戦争の形態の変化もありますが、にしても大手のメディアで働くジャーナリストは前線に行かなくなりました。会社が行かせないという側面があります。(私たちも興奮した学生側に銃を突き付けられ、相当に危険な状況を迎えたり、KCIAに検束されたりしました)同時に、戦争遂行当事者が国益という名の下

に都合のよい情報を報道させようとする力が大きく作用するようになりました。そういう取材しかさせないという規制が敷かれるようになったのです。戦争報道の犯罪とでもいうべき状況を招来しているわけです。我われも原稿を東京に電話送稿したのですが、途中で何度も切られました。盗聴されていて都合の悪い部分になると切ってしまうのです。ですから写真の電送もソウルから米国のAPにいったん送り、APから朝日・東京へ迂回するという手段をとりました。

そして大手のメディアに代わって、いまは通信社と契約しているフリーのジャーナリストが危険を承知で出て行くという状況が生まれています。去年、ミャンマーで射殺されたフリーカメラマンの長井健司さん（50）のそうしたお一人でした。その点については、あらためてメディアと戦争報道というテーマでお話する機会に譲りたいと思います。



光州事件は、朴大統領殺害事件のあと、韓国の民主化を求めて立ち上がった学生・青年たちが光州でついに武装し、戒厳軍と正面からぶつかった事件でした。韓国建国後、李承晩政権を倒し、朴政権をも再三揺さぶってきたデモ史上・民主化闘争史上初めてのことであり、衝撃的な出来事でした。権力側もこれまでの警察力にかえて、軍の精鋭を前面に投入し流血を避けようとはしませんでした。その意味でも光州事件は、民主化とは「力の支配」を拒否することだという根源的な教訓をあらためて内外に示しましたし、この事件を忘れてならない理由はそこにこそあると思います。「力の支配」を拒否し、もの事を民主的な手続きで決める「法の支配」を優先する考え方、民主主義の根幹である言論の自由を保障すること、そのことを手にするために光州の市民と学生らは血を流して努力したのです。私たちが取材したのは28年前のごくわずかな時間でしたが、それでもメディアに生きる人間として、ジャーナリズムの根幹的な心構えに通じる本当に貴い教訓とメッセージを頂いたというか、託されたと思いましたし、それはいまなお少しも色あせてはおりません。

最後に一つつけ加えさせていただきますなら、「力の支配」の絶頂を極めたのが広島・長崎への原子爆弾の投下でした。私は朝日新聞記者時代に二度広島で仕事をし、そして07年の春までの四年間、広島平和文化センターで平和行政にたずさわりましたが、国際法に違反する罪深い原子爆弾をなくすための核兵器廃絶運動が発信し続けているメッセージ、つまり「人間と核兵器は共存できない」というメッセージは、まさに「力の支配」からの脱却を内外に広く問い続けているわけです。

### 光州と広島。

もともと権力者とは、つねに自分に都合のよい「歴史」を残そうとするものです。そこには彼らの事績はあっても、民衆の真の姿が記されることはありません。

韓国の権力者は、言論を弾圧し、批判者を抑圧したうえで、御用の学者、御用のジャーナリストらに、自らの「歴史」を書かせようとしてきました。

広島・長崎の原爆投下もプレスコードという口封じをすることによって、国際人道法に反する核兵器の罪深さを隠蔽し、戦後の核開発を容易にしまいました。あのプレスコードがなければ、果たしていまの核状況があったかどうか。

繰り返しになりますが、「力の支配」を拒否して「法の支配」をとるという教訓を、光州と広島、この二都市が発信しているのだということを申し上げて終わります。

ご静聴ありがとうございました。

—以上—